

琵琶との出会い

天童ユネスコ協会事務局員 北川 真伊

仙台駅から南進し、広瀬川に掛かる愛宕大橋の手前を左折すると、東西に店舗が軒をつらねる。

そこに見過ごししてしまいそうな、狭い路地があつて、『琵琶人の館』という立派な表札がかげられている。表通りとは違って変わった静かなたたずまいの一軒家。秋海棠や水引草が風に揺れ、まつられているお稻荷様が目をひく。長いこと空家になっていたらしいが、季節は変わりなく訪れ、新しい住人を優しく迎えられている様子が伝わってくる。

琵琶と出会って五年。荒井藍水先生のご指導を受けるようになって一年が過ぎた。それまでは本物の琵琶などを見たこともなく、ましてや弾き語りの世界などには、まったく縁がなかった。

荒井先生は、薩摩琵琶錦心流の奏者であり、永田錦心先生の衣鉢を継承されている。常に自己鍛錬への原点を語り、拍手喝采は心を迷わすものとし、自分がいかに精神を込めて弾き、聴いてくれる人にどのくらいのものを伝えることができるか、それを懸命に考えているだけ、とおっしゃる。ご指導のみごとさ以上に、先生の生き方その

ものに心動かされたといえる。

『琵琶人の館』は荒井先生の仙台教室の稽古場である。酒田在住の先生が、汽車を乗り継いで指導に通われるのだ。つまり出張教授である。邦楽の中に琵琶の音が絶えることがないように、後継者を育てることに力を注いでおいでなのだ。

何が入っているのか、いつも重いリュックを背負い、良寛和尚のような風貌で、飄々として、わたしの前に現れては、また去っていく。

音痴で通っているわたしは、これまでひと前で歌うことなど、まずなかった。初めて『琵琶人の館』を訪れた時のことは今も忘れられない。「音痴？大いに結構。琵琶には洋楽の音階、音程に慣れている人にはとても理解できない音が入ってくるから、何も知らない方がいい」と言われた。先生の面前に座らされ、おそろおそろ声を出してみた。知らぬ間に、自分では気づかない自分を先生が引き出してくださるような気になっていた。琵琶の世界に足を踏み入れることができた第一歩であった。

最初の稽古は、金剛石であった。何十回何百回うたっても修了のサイン

がでない。しかし、次の段階に進んだ時、最初の基礎がいかに重要であるのかを思い知ったのである。

大きな撥が第一絃をとらえながら、バチツと腹板をたたき、張りつめた緊張感。やがて静かな音に変わって、もののあわれの世界に誘いこむ。「乱れゆく／＼人の心を」四つの緒が、ひきしめる音色だ。

弾法に入るには、まだ時間がかかりそうだが、生活の中に琵琶の響きがあるようになってから、物事に対する考え方が少しずつ変わってきた。見えないうちの中にある真実。余白をかかえることの大切さ。無心になるということが、わたしにとっては最も厳しい鍛錬だ。

琵琶は語り物音楽であるから、ストーリーの中に自分の思想、考え、あるいは歴史的な事柄を音にのせていく。生きることそのものに融合するのだ。

近頃、肩の力をぬいて、自然体で暮らしてみようと思つようになった。そうなるまで、生きていくことがどんなにささやかなものであっても、捨てたものじゃないな、と気づくのである。